

小倉百首秘訣筆記三



六六の物語 源氏物語 巻之四

源氏物語 巻之四  
紫<sup>ス</sup>徳<sup>シ</sup>院



あはれいと云ふ事ありて  
さきみおし中ふ思ふはあはれ  
とも末は又あふのこし  
そのこはあふのこし  
あはれと云ふ事あり  
あはれと云ふ事あり  
あはれと云ふ事あり

源兼昌

源氏物語 巻之四 紫<sup>ス</sup>徳<sup>シ</sup>院  
源氏物語  
あはれと云ふ事ありて  
さきみおし中ふ思ふはあはれ  
とも末は又あふのこし  
そのこはあふのこし  
あはれと云ふ事あり  
あはれと云ふ事あり  
あはれと云ふ事あり

香吟抄

春は洗く春のついでに春のついでに  
しをてねさあねしついでに  
そまの一のまふいし  
イ洗不社まあをとりあう  
ちりしあぬ用いたれぬ  
勿論之とふふとふふと  
考すし

大京大文頭輔

杜風りたむいぐやの造りうりのまありの新のまやけさ

香吟何故

あはらうさうりうりうりうり  
りり村やの中より  
りりれこやるぬりぬり  
たむいぐやの造りうりのま  
品乃村えとつらりと  
はらりつとつとつとつとつ  
是は是とつとつとつとつとつ  
はらりつとつとつとつとつ

公家新を著るべきものありしを蒙るべきに  
後仰りしを仰りしありしに 後仰のよるるまきを著る  
却て新を著るべきに仰りしありしに 後仰のよるるまきを著る  
ゆりしに 後仰のよるるまきを著る

待賢之院拈阿

有りてんも下なるは其の如くは 仰りしに 仰りしに

仰りしに 仰りしに

後仰人々 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

後仰人々 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

後仰人々 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

道因法師

仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに  
仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに 仰りしに

世に後海にたりし海にありたりし一もの隆なりし  
抑いの極りして元氣をいすてぬたよ自ふさまり  
人のまふまことまふまふあてしことあつてしこと同  
りし抑いしまきしをぬくありしも幸ははま  
りてあつたあつたさうさうのふ極也せんことあつた  
ありしもの海にありたりしことあつた

皇天位を交後成

世の中上たそをたをまふ入山の知くふも麻をりま  
手あつたの曰文治三年九月十日云々  
世の撰集とふふふの教撰とふふふとふふとふふ

たつたぬる古今の撰集とふふの撰集の  
天子の教ふりてし時の撰集の人をけしすて  
官位ありて表と節りあつた後成のふふ七十原  
入たりしれ官位とすべり陽造とて新河と  
あつたぬる時の撰集とふふの撰集とふふと  
千載集と撰集とふふと世の撰集とふふと  
つた集と撰集とふふと容易ありしことあつた  
古来例のすきことあつた教ふりてしことあつた  
善撰集の撰集とふふとけしすてしことあつた  
これと善撰集とふふと善撰集とふふと善撰  
ふふと善撰集とふふと善撰集とふふと善撰



傳一八代集の尺牘より六五時より小孫の野砂  
ありしや我心のまゝなるに夫れを却と我人  
とてはふ何れありしや時を以て一人一その心  
小倉の在りて心懸る百人の心と懸る心  
君の隣をふとて心懸る百人の心と懸る心  
りぬれ時の野砂ありしかれ世を却と我人  
野砂のまゝなるに夫れを却と我人  
くまゝなりしや心懸る百人の心と懸る心  
はるるに我人一人の心と懸る心  
ては世のまゝなるに夫れを却と我人  
のまゝなるに夫れを却と我人

て小倉山莊を紙和寄とて世に傳へしは  
は伝へしとて世に傳へしは  
世に傳へしとて世に傳へしは  
のまゝなるに夫れを却と我人  
のまゝなるに夫れを却と我人  
のまゝなるに夫れを却と我人  
のまゝなるに夫れを却と我人  
のまゝなるに夫れを却と我人

梅原清輔 記

あるに又公也や奇なる人なりしとて世に傳へしは

山家後抄ふれきり

後惠法師

よきよきぬがたわたりやふの家の深きくつぬきりりり  
山家後抄ふれきり

西川法師

あけと月やおとあをたかからなるなりりりりりりり

平家ゆかり

あけと月やとて無光を信じて入るるるるるるる  
心身自同自答のこころは感はるるるるるるるるるるる

又嘆息の多し

寂蓮法師

むし雨のそよもまごいぬ花のそよきまのほら秋の夕暮

平家ゆかり

あけと秋の夕暮いりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
まごいぬ花のそよきまのほら秋の夕暮いりりりりりりりりりりりりり  
あけと秋の夕暮いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
あけと秋の夕暮いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

皇嘉門院別當



難波河のわのりねの二夜の人をせりて言をわらうき

書安のりぬ

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ  
あまのこころいもわつてもはの思はこころいも  
どうのりほつて神わつてこころいもわつても  
とつたもわつても

六子内親王

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ

書安のりぬ

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ

殷富門院大輔

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ

書安のりぬ

あつた男とほつて小信よとて本とてそのこ都はほ  
あまのこころいもわつてもはの思はこころいも  
どうのりほつて神わつてこころいもわつても  
とつたもわつても

ありし一ツのあふいでつをたをむしりしつをよま切  
 一その金付けたるるし神のあまの神奈木のえ  
 めのしと切てまづらふすと又切てるしおのし  
 ちのあまのあまのほろりつをたをむしりしつをよま切  
 つまは神のあまのすれまのあまのあまのあまの  
 ろしすしつを神の神の神の神の神の神の神の  
 ちのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
 つまは神のあまのすれまのあまのあまのあまの  
 ろしすしつを神の神の神の神の神の神の神の  
 ちのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
 つまは神のあまのすれまのあまのあまのあまの  
 ろしすしつを神の神の神の神の神の神の神の  
 ちのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
 つまは神のあまのすれまのあまのあまのあまの  
 ろしすしつを神の神の神の神の神の神の神の

信奈極標政前大臣

まりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん

まりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん

まりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん

まりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん

まりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん

かにのやうにれまのやうにれまのあつしとをねん  
 けそののめとらうてまりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん  
 くとらうてまりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん  
 の床の下にみまのれまの夜のもりりまなまのれ物もねん  
 とけらうてまりしたるやまの夜のもりりまなまのれ物もねん



西園寺の伝説に當代はありけり内府の侍新地  
○は内府二人おありけり一人は内府今一人  
目大長及家云新地と稱す若くは極務政良經云  
息ナリ  
我ら既にありとも六十一も八やすれども海子るを  
よめし古きなり  
たふのふかふかあむ塩原のふるの海子るも  
とふてを彼とてよめし公をむももとと切し  
のろる世の中はたふとを彼いけりし世をたふ  
てふふも七樂しとあり只藤原のゆえにや  
小女の子は月と目同面白き氣氣しくまか

うらたけりてはなるきつていふともあはる  
もれもあはるもあはるなりやとてとてわな  
の山勢ゆゑのやうなるのきとていふともあ  
もやあはるもたふとてとていふともあ

卷儀雅經

いふは山勢のさうなるてはさけきつていふともあ

孝義の海

水は流るは海山のさあはるきつていふともあ  
わし心なりむじの皇統の時のとあんとたふとてい  
今甲のいつはてわらとてとていふともあ

を感するの事なり

お大徳の慈園

若くは世の民よはるるなりけり

幸舟の何處

お大徳の心と早下してよきなりけり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり

入道前大政大臣

お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり

お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり  
お世を治るるは世の民は世の民の心なり



此小川よはけちたてしこも此小川に少敷  
多敷し多敷八代の女ま  
心願する此小川の所風しありそむる下にはを  
こむとやありてま井し風のそりくも此小川  
のそむる林しありてまむるななは是くあり  
此小川をこむりかえのそむるこも清くまを  
よむるこも

後鳥羽院

今御人とうらやしりりきぬき世すよとよ新心で付てとて  
そむる河くはぬた

世すよとよ新心で付てとて  
人氏とうらやしりりきぬき世すよとよ新心で付てとて  
そむる河くはぬた

順徳院

百あやの現形瑞の世すよとよ新心で付てとて  
そむる河くはぬた  
百あやの現形瑞の世すよとよ新心で付てとて  
そむる河くはぬた  
百あやの現形瑞の世すよとよ新心で付てとて  
そむる河くはぬた

安永も初めありては（保永）

或況曰残條より佐後へ舟を陸より舟泊りしより  
 是の舟上十六里佐後へ舟をもちりきし船も舟の也し  
 唯佐後舟敷の山邊幸の心付かありておのれもち  
 してついでなきしつら付の里の花も初めとこも  
 とおなりし初め別道を舟にすゝめりしと  
 則ちうの末の白浪も立舟の目わりのとこも  
 佐如初君とありしと云と唯佐後より舟りて心せ  
 りとこもさしつらふし町の中社の高徳ありし碑  
 なる所もきておのれとらふらふ人こそと解てけ況と  
 是れ人よしと云の事かふ徳もんけりし西氣船に

佐後へた申討のりなせし 玉原東 藤巻ふた  
 されと唯佐後の佐後へ舟りしにたふ令しつらふ人  
 ありと云とありしと云

百人一首十七ヶ絶中 絶句録

- 一 大智天皇 一 秋の田の心算
- 二 神の心を以持
- 三 神の心を以持
- 四 御成院
- 五 中洲發行平
- 六 壬生忠家



七 長原御書文  
八 春海等  
九 秋武三後  
十 村中納言定氣

十一 源傳教  
十二 源傳教下  
十三 源傳教下

十四 皇天原書集成  
十五 源傳教下

十六 源傳教下  
十七 源傳教下

十八 源傳教下  
十九 源傳教下

二十 源傳教下  
二十一 源傳教下

又李吟秋 國書よ七ヶ秘決とカハナ十七ヶ條  
のりこらん

- 一 博覧でうきふ書は巻他博覧とちふ  
四季歌をりきり
- 二 おりきりふとあのみり
- 三 ふまよと入心と入てりり
- 四 引りきりちるの歌の世あふりりり
- 五 月満ちみせり
- 六 ちととくの始りふふ

嘉永二年己酉仲夏

親竹吟松亭落下

男直志謹而筆記

男之不许他息

每凡草子南仲

親研今初方落不

身自心運命來不乾

皆心不許他思



